



くま だ やま きた

熊田山北古墳群

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (058) 383-1123
平成20年2月



A区の空中写真

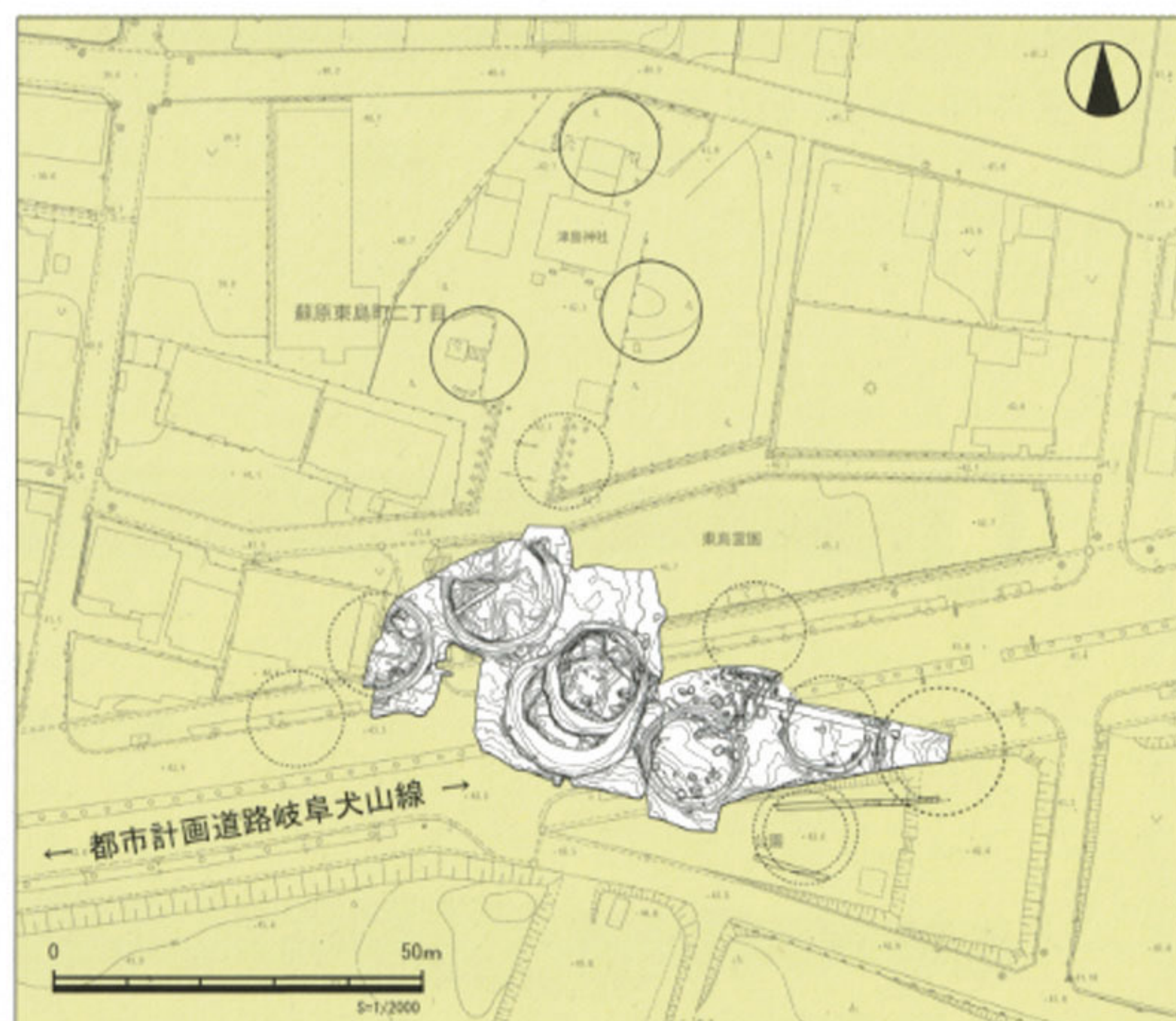
1. 発掘調査の経緯と古墳群の特徴

熊田山北古墳群は、蘇原東島町2丁目地内に所在する古墳時代中期の古墳群です。発掘調査は、岐阜市と愛知県犬山市を結ぶ道路、「都市計画道路岐阜犬山線」の建設工事に伴う緊急発掘調査として、平成9・10年度に実施しました(A区・B区)。

この道路工事は、市内では蘇原地域から着工されました。路線には広く埋蔵文化財が分布していましたが、詳しい内容については発掘調査が行われるまで不明でした。道路建設に係る一連の調査は、蘇原地域を横断して進められたため、遺跡の内容を広範囲で掌握することに大きな成果を上げています。発掘調査は、熊田山北古墳群のほか、広畑野口遺跡で実施されています。

熊田山北古墳群は、古墳時代後期に盛んに造られる群集墳の先駆けとなるものです。一定範囲の土地に、小型の円墳が次々と構築されているのが特徴です。後期の群集墳では一般に横穴式石室が採用されますが、中期の熊田山北古墳群の頃は石室が構えず、木棺を直接埋葬しています(木棺直葬^{じきそう})。

熊田山(標高72m)の北麓には、かつて41基以上の古墳が確認されていましたが、現在はほとんど見当たりません。これらのなかで、熊田山北古墳群として厳密にグループ分けした場合、最低で13基と推定されます(右図)。

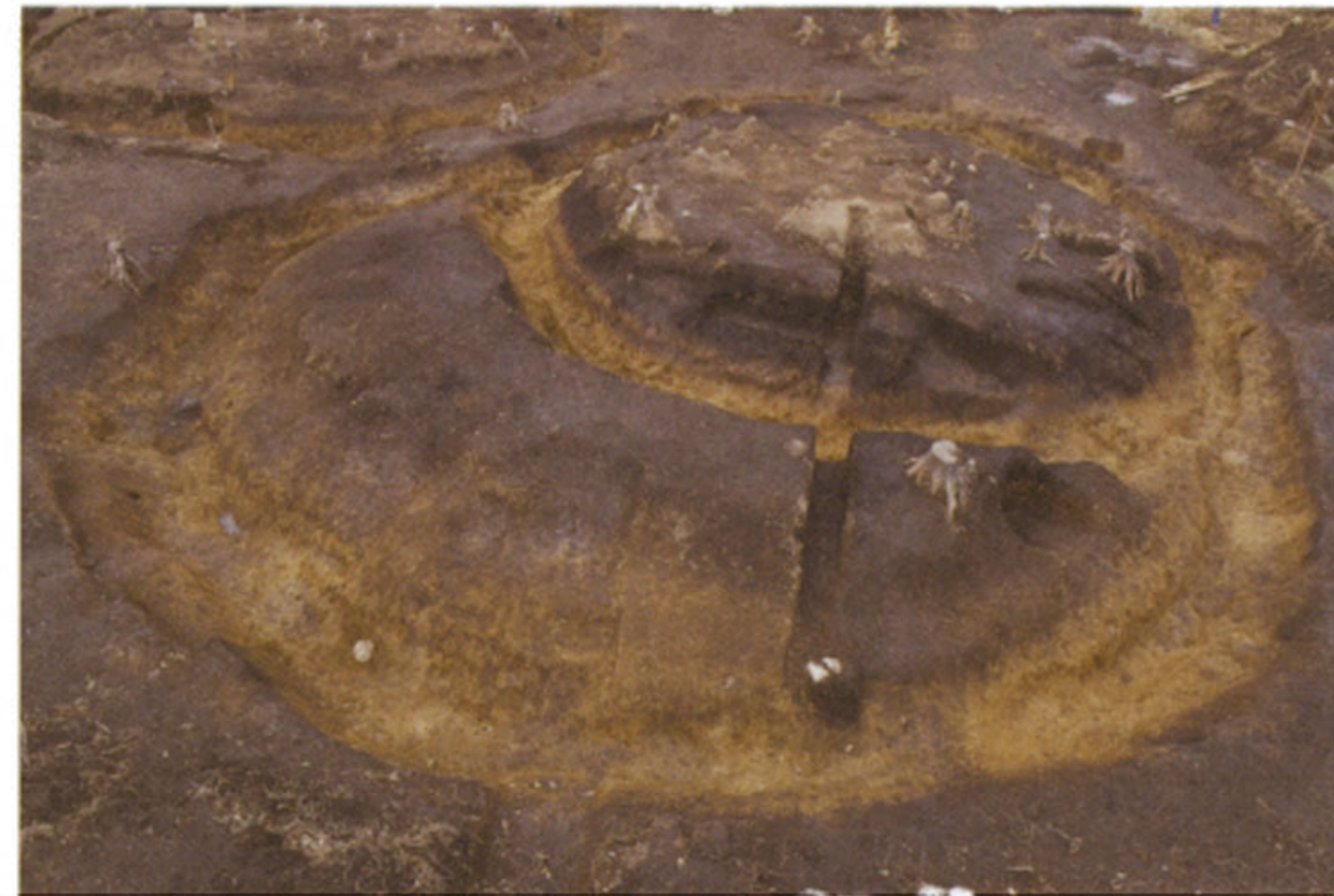


熊田山北古墳群の位置図

2. 発掘調査の成果

熊田山北古墳群の総基数13基の内訳は、津島神社境内に現存する3基、発掘調査で検出された8基、過去の記録から知られる2基となります。今回の発掘調査により、墳丘が削平されてしまっただけを地中に残す場合が多いことが分かりました。そうすると、かつて熊田山北古墳群を構成した古墳の実数は、もっと多かったものと思われます。古墳は全て円墳と推定され、直径11~14mの規模となります。

発掘調査した古墳のうち、最も残りがよかったものは1号墳です。この1号墳は、特異な形をしており真上から見ると円形ではなく達磨の様です。この形になった理由は、古墳の周りに掘られた周濠が本来は円形だったのですが、後から南西方向へ膨らむように追加されたためです。1号墳の頂部からは、遺体を埋葬した部分が2基（第1主体部と第2主体部）確認されましたので、埋葬を追加する際に、古墳の形を変更したのだと考えられます。両主体部から出土した須恵器型式を比較することによって、第2→1主体部という新旧関係が分かりました。その年代は、およそ5世紀後葉から末になると考えられます。



1号墳の完掘状況 周濠の追加によって円形ではなく達磨のような格好になっています。



第1主体部出土の須恵器 市内では最古クラスの須恵器です。作りは非常に精製です。



周濠から出土した土師器甕 埋納されたような状態で出土しました。



第1主体部の副葬品出土状況 1,700点以上のガラス小玉と、勾玉、金環、素環頭太刀、鉄鎌、刀子、須恵器等が出土しました。



第2主体部の副葬品出土状況 直刀、鉄鎌、鉄鎌、刀子、須恵器等が出土しました。



第1主体部に副葬された素環頭太刀 (柄に銀糸が巻かれていました) 全長 75.2cm



第2主体部に副葬された直刀 全長 99.2cm



11号墳

津島神社境内に残る3基の古墳の一つ。現在でも、墳丘の高まりを確認することができます。昭和34年の伊勢湾台風の倒木により、墳頂部より須恵器、鉄器が出土した記録があります。

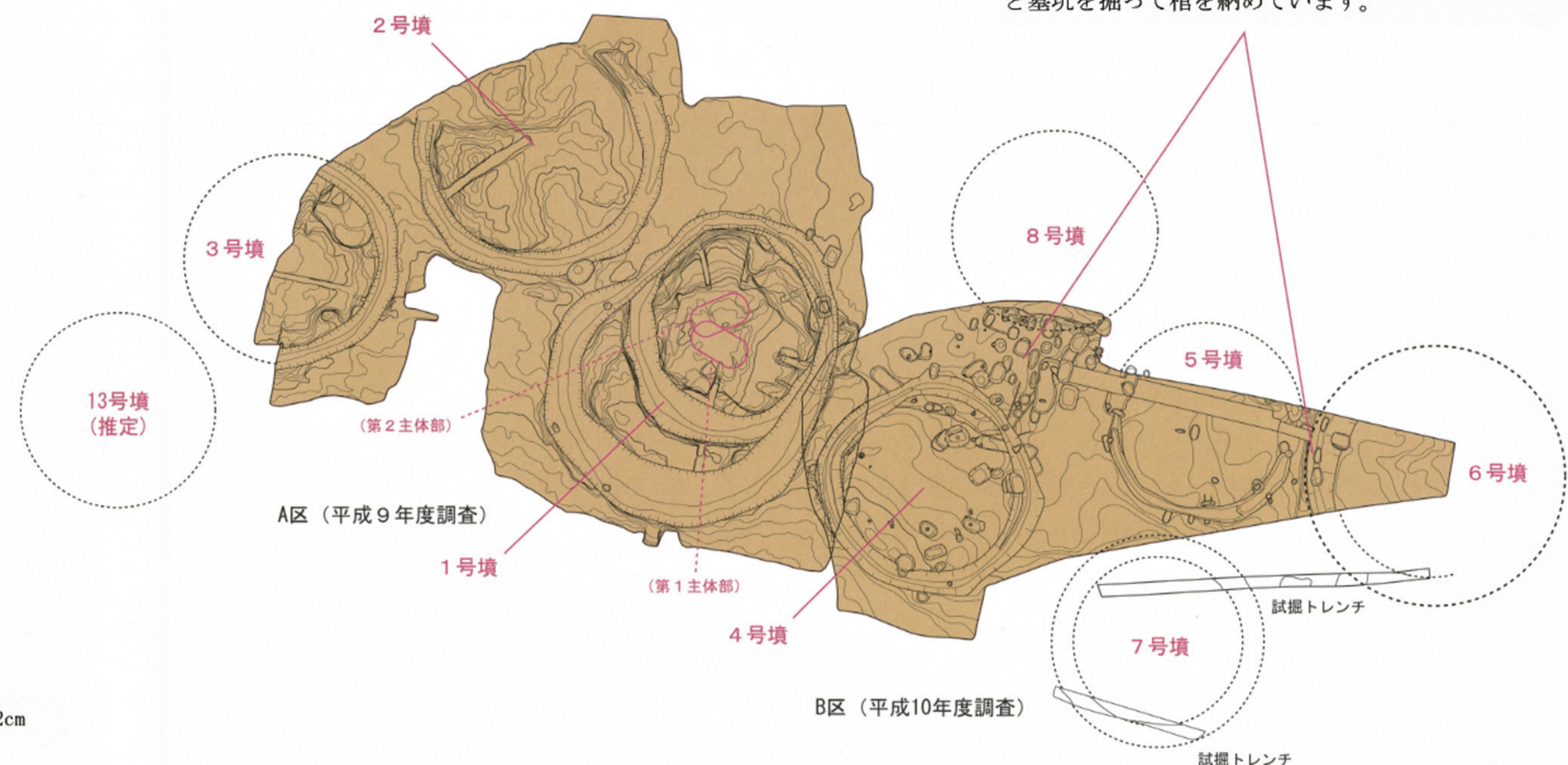


中央の小高い部分が11号墳です。

土坑墓群

中世(13世紀後半以降)から近世の土葬墓が検出され、鉄釘、中世陶器、寛永通宝、刀子、人骨等が出土しました。

中世墓は、完没していなかった古墳周濠の窪みの中に、棺を直接埋葬したようです。近世墓は、整然と墓坑を掘って棺を納めています。





- 現存する円墳
- 今回発掘調査した古墳
- 現在確認できない円墳
- ◻ 現在確認できない前方後円墳
- ◻ 古代寺院遺跡・中世館址
- 水田利用に見る低湿地
- 台地地形を現す等高線の一部

0 1000m
1:20000

明治24年測量 明治43年度版 大日本帝国陸地測量部

蘇原・各務地域の古墳分布図

3. 周辺の古墳群と古代寺院

熊田山北古墳群が位置する蘇原地区東部と各務地区の一部には、多くの古墳が造られました。現在、姿を失ってしまったものも過去の記録から集めると上図のようになります。熊田山を中心に多くの古墳が集中して分布していることが分かります。

この中に見られる野口大塚古墳、的場古墳、坂井狐塚古墳などの前方後円墳は5～6世紀に築造されたもので、この地域の首長クラスの墓であると考えられます。一方、5世紀後葉には熊田山北部へ派生する台地上に古式群集墳と言える熊田山北古墳群（円墳）が造られ、6～7世紀には熊田山南北の中腹から山裾、各務山（標高87.8m）の山麓に横穴式石室を採用した群集墳（円墳）が展開したと言えます。

これらの古墳群が分布している地域は、各務原台地高位面の北西部に該当し、複数の谷筋によって分断された地形となっています。このような地形を、半島状地形、舌状台地などと呼びます。熊田山を中心とした古墳群は、半島状地形の一つを占有するような状況を見せ、そこには7世紀後葉になって平蔵寺という古代寺院が建立されます。また、谷を一つ隔てた西方には野口廃寺、山田寺跡などが存在します。これら古代寺院連立の背景には、壬申の乱（672年）の活躍に対する論功行賞として、寺院技術者たちの協力があつたとする説があります。古墳の分布から見ると、蘇原地域における古代勢力は古墳時代から根付いていたと考えられ、その台頭は野口大塚古墳や熊田山北古墳群の存在によって知ることができます。

遺跡と地形の関係を見ると面白いことが分かります。まず、前方後円墳は平地や谷に面する目立つ場所、熊田山北古墳群等の初期群集墳は山裾、横穴式石室が採用された熊田山北麓古墳群等は山の中腹寄りの斜面、そして古代寺院は各半島状地形の中央部に造られたと分析できます。それぞれの施設を適した場所に構築するという理由に加えて、中央集権体制下の地方において一定の都市計画が存在したことを指摘できると思います。